

# TOBUNKEN NEWS

2008  
no.32



独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43 <http://www.tobunken.go.jp>

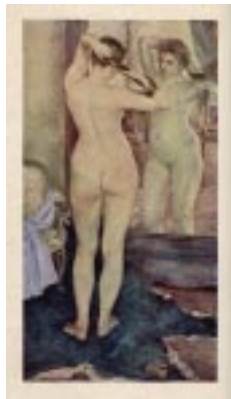
## 平成20年度国際研究集会に向けて

日本近代洋画の父と称される黒田清輝の『朝妝』(1893年作)は、明治時代の日本に西洋美術のヌードを紹介し、公序良俗をめぐる“裸体画論争”をひきおこした作品として知られています。日本近代美術を語る上で欠くことのできない『朝妝』ですが、作品そのものは昭和20(1945)年、戦災により焼失してしまいました。そこで現在の私たちは、『朝妝』についての文献や写真といった諸資料にあたりながら、そのありし姿に一步でも近づこうとします。『朝妝』の写真は戦前の撮影によるためモノクロが圧倒的に多いのですが、大正13(1924)年12月発行の美術雑誌『アトリエ』第1巻第10号に掲載されたカラー口絵は、彩

色についての情報を提供してくれる数少ない資料として貴重です。モノとしてのオリジナルは失われてしまいましたが、私たちは諸資料を通してオリジナルのイメージを想起することができるのです。

『朝妝』のばあい、それは不幸にして失われた作品として私たちに記憶されていますが、現代アートのなかにはインスタレーションのように初めから保存されることを放棄したものもありますし、“伝統芸能”としてその芸が寸分違わず伝承されていると思われがちな無形文化財も、演じられる時代に応じて様態を変えながら息づいています。古来より伝わる有形の文化財にしても、過去に度重なる後補や修復を経て当初の姿と大きく様変わりしているケースは珍しくありません。事情はさまざまですが、改変をくりかえす文化財にしても一過性のアートにしても、それらが宿しているはずの“オリジナル”の姿をさぐりながら後世へ伝えようとする思いは共有されるべきものでしょう。

文化財アーカイブの構築を担う企画情報部では、平成20年度に開催する「文化財の保存に関する国際研究集会」にむけて、この“オリジナル”にまつわる諸問題、とりわけ“オリジナル”を伝える諸資料のあり方をテーマとして取り上げることにしました。テーマ設定について



『アトリエ』第1巻第10号の表紙と  
黒田清輝『朝妝』口絵(東京文化財研究所蔵)

の5度にわたる討議を経て、9月26日には敦煌文書の真贋をめぐるケース・スタディを中野照男（企画情報部）が行い、さらに10月3日に飯島満（無形文化遺産部）、11月14日に稲葉信子（文化遺産国際協力センター）、21日に清水真一（同センター）、12月12日に鈴木規夫（所長）といった他部の研究スタッフを交えて討議を行いました。いずれも“オリジナル”を核としながら、無形文化財の記録のあり方や文化財の修復理念等、各分野で抱えている問題をめぐって活発な意見が交わされました。今後は美学の研究者や復元にたずさわる方等、所外の方々を交えた小研究会を重ね、12月の国際研究集会に発展させていきたいと願っています。

（企画情報部・塩谷 純）

### 「彦根 屏風」光学的調査の パネル展示と修理後の調査

**昨**年度より当所では、国宝「彦根 屏風」の調査研究を彦根城博物館と共同で行っています。「彦根 屏風」は近世初期風俗画を代表する著名な作品ですが、百年以上もの間、本来の屏風装が解かれ一扇ずつ分かれた状態で保存されてきました。また経年による汚れや絵具の剥落の危険性があったため、この2カ年をかけて国の文化財保存補助事業として文化庁の指導のもと、本格的な修理が行われ、額装から屏風に改装されました。無事修理が完了し、彦根城博物館「よみがえった国宝・彦根 屏風と湖東焼の精華」展において、修理完成披露が行われました（2007年9月28日～10月26日）。展示会場では、これまで行ってきた光学的調査の結果の一部をパネルでご紹介致しました。

「彦根 屏風」は縦94.0cmと屏風としては比較的小振りな作品ですが、大型の高精細画像に

よって作品の卓越した細部の表現や、赤外線画像によって肉眼では見えない色の指示書きや下描き線が存在などを掲示し、多くの観覧者の方々にご好評を頂きました。また、この展覧会終了後に、屏風装に改められた状態を撮影し、修理を経て安定した表面の状態を高精細画像および近赤外線画像によって調査・記録しました。この成果をまとめた報告書は今年度末に刊行する予定です。



「よみがえった国宝・彦根屏風と湖東焼の精華」  
展覧会会場でのパネル展示

（企画情報部・江村知子）

### 人形浄瑠璃文楽の囃子<sup>はやし</sup> に関する聞き取り調査

**無**形文化遺産部では、プロジェクト研究「無形文化財の保存・活用に関する調査研究」の一環として、11月12日に国立文楽劇場（大阪）楽屋で、昭和38年以降、文楽の囃子<sup>はやし</sup>を引受けてきた望月太明<sup>もちづきためぞう</sup>蔵社中の、藤舎秀左<sup>とうしゃしゅうさ</sup>久師<sup>く</sup>と望月太明吉師<sup>ためきち</sup>の聞き取り調査を行いました。その後、12月25日には、同じく国立文楽劇場で、人形浄瑠璃文楽技芸員吉田簀助師の聞き取り調査も行いました。

秀左久師は笛を、太明吉氏は笛以外の鳴物を担当される社中のベテランで、また簀助師は重

要無形文化財保持者の人形遣いでいらっしゃると思います。三師からは、文楽を陰で支える重要な役割を担いながら、これまであまり注目されていなかった囃子について、その変遷とそれに関わった人間模様や、修業のありさまなど、興味深いお話を伺いました。社中の両師は公演中の忙しい中で、また簀助師は公演のない日に劇場まで出向かれて、それぞれ丁寧に調査に応じて下さいました。

(無形文化遺産部・鎌倉恵子)

#### 第49回近畿・東海・北陸ブロック 民俗芸能大会調査

2007年10月28日に和歌山県上富田町の上富田文化会館において開催された上記大会を調査しました。無形文化遺産部無形民俗文化財研究室では、毎年全国各地で開催される民俗芸能大会の調査を継続的に行っており、今回もその一環として実施しました。

今年度から近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会はその運営方法を大きく見直し、ブロック内各府県が隔年で出演する形となり、6県から8団体が出演しました。新しい方式の初年度とあって、その運営が注目されましたが、会場は終始超満員で盛り上がり、演技時間も昨年までと比べ比較的十分確保されるなど、成功裏に



「伊勢太神楽」(三重県桑名市)

実施されたことが確認できました。

(無形文化遺産部・宮田繁幸)

#### 韓国南東部における共同調査 —日韓共同研究

当所では、石造文化財を対象とした環境汚染の影響と修復技術の開発研究について、大韓民国・国立文化財研究所と共同研究を進めています。今回は、張大石(東北芸術工科大学)・森井順之の2名が、2007年11月20日から24日までの5日間、韓国南東部(慶州・大邱)の石塔や石仏などを対象に、石造文化財保存修復の現状を調査しました。

慶州では感恩寺三層石塔(国宝)などの石塔の調査を実施しました。感恩寺三層石塔は韓国では珍しく凝灰岩製の石塔ですが、風化による損傷が多く見られ、国立文化財研究所の直轄で解体修理が行われています。今回は修復現場を訪問し、韓国側研究者と修復材料や技法に関する議論を行いました。また、翌日は大邱に移動し軍威三尊石仏(第二石窟庵国宝)などを訪問しました。崖地に仏龕を掘り花崗岩製の仏像彫刻を安置していますが、仏龕内部における漏水や仏像彫刻表面の層状剥離など劣化機構の解明や、将来の保存修復方案について今後議論を行うこととなりました。



感恩寺三層石塔の保存修復工事現場

また、23日には国立公州大学校で開催された「石造文化財の保存に関する国際研究集会」に参加し、東京文化財研究所が国宝及び特別史跡・臼杵磨崖仏において実施している調査について講演を行いました。講演後は、多くの研究者から質問や助言を頂戴し、今後の参考となりました。

（保存修復科学センター・森井順之）

### 江袋教会の焼損調査と修復指導

**長** 崎県教育委員会の要請により、新上五島町にあり、2007年2月に焼損した江袋教会の現地調査及び修復方針及び方法に関して指導を実施しました。江袋教会は明治15年（1882）に建立された、木造瓦葺き平屋建てで、長崎県内では最古と思われる木造教会であり、海を見下ろす急傾斜の山腹に建てられています。



長崎県新上五島町にある江袋教会 損傷前



損傷したステンドグラス

す。屋根は単層構成、変形寄棟作りで構造的にも貴重なものとされていましたが、昨年漏電が原因で焼損しました。焼損したものの、建て替えてしまうよりは、使える部材は少しでも救いたいという地元の信者の皆様の願いにより、保存修復科学センターでは、現地の調査を実施し、比較的焼損の程度が軽い部材に関して、樹脂含浸を施し、利用できるようにするなどの修復指導を実施しました。

（保存修復科学センター・中山俊介）

### インドネシア・プランバナン 遺跡復興支援第3次調査

**文** 化遺産国際協力センターでは、2006年5月27日のジャワ中部地震で被災した世界遺産プランバナン遺跡の復興支援事業への協力を行っています。日本の草の根文化無償の支援によるガルーダ祠堂の足場の架設工事の完了を受けて、2007年10月22日から11月4日にかけて第3次ミッションを派遣しました。今回の調査では、部分解体が始まったガルーダ祠堂を中心に、頂部の被害状況と内部構造の確認、過去の修復に関する文献収集調査および聞き取り調査を行ったほか、ガルーダ祠堂とほぼ



東京文化財研究所とジョグジャカルタ特別考古遺跡管理事務所のメンバー



ガルダ祠堂 解体が始まった頂部の調査

同じ構造をもつハンサ祠堂を対象に、構造体の振動特性の究明のための常時微動計によるモニタリングを開始しました。これらの調査はジョグジャカルタ特別州考古遺跡管理事務所、ガジャマダ大学との協力を得て実施されました。

現在は、調査に先だって作成された祠堂各面の幾何補正画像を活用し、各石材の破損状態、補修方法と解体範囲を図示し、修理事業費の積算が可能な水準での設計資料を整える準備を進めています。さらに、祠堂の構造特性に関する解析結果に基づき構造補強方法を検討の上、修理設計案を本年度中に提示していく予定です。

(文化遺産国際協力センター・岩出まゆ)

### 大エジプト博物館保存修復 センター設立への協力

文化遺産国際協力センターは、エジプトのカイロで建設が進められている「大エジプト博物館（Grand Egyptian Museum）」の附属機関である「保存修復センター」の設立に向け、国際協力機構（JICA）の要請を受け、技術的な支援を行っています。保存修復センターに必要な機材リストの作成、同センターで活動する専門家の人材育成、技術移転等、エジプト側が求めているさまざまな要請に対して、助

言を行っています。これに関し、11月12日から20日にかけて、清水センター長、山内地域環境研究室長、谷口特別研究員がエジプトに出張し、エジプト側の担当者と今後の協力について協議を行いました。現時点では開設の準備段階で必要な支援を行っていますが、同センターの開設（2008年4月予定）以後は、ワークショップ等を通じて、具体的な人材育成・技術移転の面で協力していく予定です。



建設中の「大エジプト博物館保存修復センター」

(文化遺産国際協力センター・山内和也)

### バーミヤーン出土仏典の 保存修復協力

文化遺産国際協力センターは、運営費交付金およびユネスコ文化遺産保存日本信託基金によって、平成15年度（2003年）から「バーミヤーン遺跡の保存修復事業」を実施しています。平成15年度のバーミヤーン石窟の調査では、石窟から数百点を超える仏典断片が発見されました。仏典断片は、仏教時代の記録として重要な資料ですが、折れ曲がり収縮して文字の判別が難しい状態でした。今回、住友財団による助成を受け、アフガニスタン人専門家を招聘し、これらの仏典断片の保存修復を日本で実施しました。保存修復作業をアフガニス

タン人専門家と共同で行うことにより、アフガニスタンへの文化財復興協力のための人材育成にも寄与することができました。

(文化遺産国際協力センター・山内和也)

### シルクロード沿線文化財保護 人材育成プログラム

日中の専門家が指導し、財団法人文化財保護・芸術研究助成財団と韓国企業サムスン社が資金を提供し、5年間にわたって中国の文化財保護に従事する人材を育成する「日中韓シルクロード沿線文化財保護人材育成プログラム」は、10月8日から12月27日までの日程で、第2年目後期「紙の文化財保護」研修コースを、北京の中国文物研究所において実施しました。日本からは、計12名の専門家が196時間にわたって講師を担当しました。伝統的な保存修復技術だけではなく、現代科学によって解明された紙の文化財の材料や技法に関する講義、新しい欧米的な保存方法などについての講義もあり、シルクロード沿線の6省から集まった12名の研修生が十分な研修成果をあげられるよう、授業に工夫を凝らしました。最後の4週間は国宝修理装演師連盟の技術者2人が中国側の専門家とともに実技実習を行い、研修生た



清水真一センター長による文化財保護概論



坂田雅之氏（国宝修理装演師連盟）による実技指導

ちは短期間ながら冊子、軸装物の修復技術を習得しました。伝統的な修復技術に関しては日中の方法に違いがあり、「中国の紙の文化財」保存に貢献するため、日本側の専門家がどのように日本の技術を伝えていくか、現場での試行錯誤が続きました。12月27日には中国国家文物局の侯菊坤人事労働司長が出席して修了式が行われ、研修生に東京文化財研究所と中国文物研究所連名の修了証が授与されました。

(文化遺産国際協力センター・岡田 健)

### イラク人保存修復 専門家の研修事業

メソポタミヤ文明発祥の地であるイラクには、世界的に重要な考古遺跡が多く存在し、また、国内の博物館には貴重な遺物が大量に保管されています。しかし、現在でも国内の治安は悪化する一方で、バグダードのイラク国

立博物館は閉鎖され、多くの収蔵品が修復を受けずに保管されたままです。

この状況を受け、東京文化財研究所は「西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業」およびユネスコ文化遺産保存日本信託基金による「イラク国立博物館の保存修復研究室の復興」事業の一環として、保存修復の技術や知識の習得のための研修を日本で実施することとしました。



真空凍結乾燥処理後の遺物のクリーニング作業  
(静岡県埋蔵文化財調査研究所)

平成19年度は、9月から12月13日にかけて4名の保存修復専門家を招聘し、東京・奈良文化財研究所、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所において研修を行いました。研修では、イラク国立博物館およびユネスコからの要望を受けて、おもに木製品の保存修復を取り上げ、保存修復の基礎講義、乾燥した木製品や出土木材の保存修復実習を実施しました。

イラクでは、ほとんどの博物館が未だに開館の目処が立っておらず、保存修復専門家は修復に必要な技術や知識の習得ができない状況にあります。当所では、今後も、イラク人自身による文化財復興を支えるために、イラク人専門家の人材育成事業を継続する予定です。

(文化遺産国際協力センター・宇野朋子)

### 石造文化財の保護に関する日中 共同研究(陝西唐代陵墓と龍門石窟)

**東**京文化財研究所が参加している陝西唐代陵墓石刻保護修復事業とユネスコ/日本信託基金龍門石窟保護修復事業は、いずれも平成18年度に最終年度を迎えようとしてい

ます。ともに石灰岩という共通した材料の文化財を対象とするものであるため、これまでも研究会の開催や現地調査、日本での研修に両事業のメンバーを積極的に合流させ、その相乗的効果を利用してきました。唐代陵墓石彫像保護修復事業では、毎年一回西安で日中専門家による研究会を開催していますが、今年も龍門石窟研究院の担当者2名が派遣され、参加しました。今回は、「石造文化財の保存処理技術に関する研究会—石造文化財の保存修復と展示方法/保存処置に際しての接合部分及び表面の化粧方法」というテーマで、事例報告と討論を行いました。日本からは石造文化財の修復に豊富な経験のある海老澤孝雄氏(ざエトス)に参加して頂きました。また、日本での研修としては、11月19日から12月16日の日程で、西安文物保護修復センターと龍門石窟研究院から各2名



現地(乾陵東門)視察



西安と龍門からの研修者(樹脂処理の実験)

の担当者を招聘し、石質文化財の修理技術、撥水材料を塗布した後の効果の評価方法、修理作業終了後の環境のモニタリングなどについて研修を行いました。最終年の修復作業実施に向けて、研修の成果が期待されます。

(文化遺産国際協力センター・岡田 健)

## 第21回国際文化財 保存修復研究会の開催

2007年12月6日に、93名の参加を得て、第21回国際文化財保存修復研究会「保存処置後のモニタリング」を開催しました。国土舘大学の西浦忠輝教授による「遺跡保存におけるモニタリングの重要性とその問題点」、インドネシア・ポロブドゥール遺産保存研究所のナハール・チャヤンダル氏による「ポロブドゥール遺跡の修復後のモニタリング」、韓国国立文化財研究所の金思恵氏による「石窟庵の長期的保存方案」の3件の発表と、総合討議が行われました。

それぞれの遺跡における様々なモニタリング方法が紹介され、参加者の間で情報が共有されましたが、それを他の遺跡にも導入するためには、さらに広くモニタリングの重要性を訴えていく必要があることが認識されました。



会議風景

(文化遺産国際協力センター・朽津信明)

## 第2回無形民俗文化財 研究協議会

無形文化遺産部では昨年度より、無形の民俗文化財の保護と継承に関わる諸問題について話し合う研究協議会を開催しております。その第2回を、「市町村合併と無形民俗文化財の保護」をテーマとして、2007年12月7日に当研究所セミナー室において開催しました。様々な文化財の中でも、地域のなかで伝承され、保護が図られる民俗文化財は、合併の影響をとくに大きく受ける分野です。当日は、近年合併を経験した市町村、およびこれまでに合併を経験しながらそれを無形民俗文化財の保護に活かしてきた市町村から、保存会活動の組織化や学校教育との連携などについて報告があり、それをもとに総合討議がなされました。この協議会の内容は、2008年3月に報告書として刊行される予定です。



会議の様子

(無形文化遺産部・俵木 悟)

## 研究会「木質文化財の劣化診断」

保存修復科学センターでは、文化財の生物劣化対策の研究の一環として、2007年11月19日、当所セミナー室において表記の

研究会を行いました。今回は「文化財建造物の劣化診断と維持管理―診断例とその対策、今後期待される技術―」と題して、京都大学の藤井義久氏から、広い範囲の最新の診断技術と実例についてわかりやすくお話をいただきました。また、九州国立博物館の鳥越俊行氏からは、「木彫像内部の生物被害を見る 文化財用X線CTによる非破壊劣化診断」として、CTが木彫像などの虫による被害の検出を含むさまざまな情報を得る強力な手段であることを、カナダ保存研究所のトム・ストラング氏より、「温度処理による殺虫処理のポリシーと、木質文化財に与える影響の科学的評価」についてお話いただきました。

(保存修復科学センター・木川りか)

『昭和期美術展覧会の研究  
〔戦前篇〕』研究会の開催

**企** 画情報部ではプロジェクト研究「近現代美術に関する総合的研究」の一環として、昭和戦前期の美術に関する論文集『昭和期美術展覧会の研究〔戦前篇〕』の平成20年度刊行をめざしています。その刊行にむけての研究会を、12月27日に当部の研究会室で開きました。発表者とタイトルは次の通りです。

- 喜多孝臣氏（早稲田大学會津八一記念博物館）  
「矢部友衛とプロレタリア美術運動—プロレタリア美術研究所を中心にして」
- 足立元氏（東京藝術大学大学院）「『悪女』と戦争—小野佐世男の漫画をめぐる—」
- 敷田弘子氏（東京藝術大学大学美術館）「昭和前期の日本における最小限住宅とその室内設備についての一考察—型而工房とその関係者のデザイン活動から」

若手研究者ということもあって、プロレタリ



プロレタリア美術研究所のポスター  
1930（昭和5）年頃

ア美術・漫画・デザインの未開拓分野に挑んだ  
発表内容は、いずれも真摯で刺激的なものでし  
た。発表者・出席者ともに『昭和期美術展覧会  
の研究〔戦前篇〕』の執筆陣が中心の研究会で  
したが、30名近くの研究者が参加し、発表を  
受けてホットな議論が交わされました。本研  
究会が、同論集刊行にむけてのよい弾みとなっ  
たことは間違いないでしょう。

(企画情報部・塩谷 純)

第2回無形文化遺産部  
公開学術講座

**無**形文化遺産部主催の公開学術講座が、  
**無**12月12日、大阪の国立文楽劇場小ホールで開催されました。開催地の大阪に相応しい題材をとということで、昭和37年（1962）に記録作成等の措置を講ずべき無形文化財「上方寄席下座音楽」の関係技芸者に指名された林家トミ師（1883 - 1970）を取り上げました。当日

( p.14へ続く )

## Column: 文化遺産とは何か、保存とは何かを問い続ける試み

### 文化遺産という言葉

私は文化遺産とは何かということを考えること、そしてそれを人に伝える仕事をしてきました。ここではとりあえず文化遺産と総称しましたが、しかしその伝えたいものを何と呼ぶのか、文化財、文化遺産あるいは文化資源、さまざまな言葉がありますが、しかしどの言葉をとっても、考えている対象を的確に示している言葉はないように感じています。実際のところ現場では、地元の人々、ディベロッパー、政策担当者など、相手によって、使う言葉がよけいな先入観を生まないよう注意しつつ使い分けています。文化財という言葉では日本の文化財保護法の現行の枠組みにしばられてしまうと思う時には、文化遺産という言葉を使う。文化遺産の社会的意義について話す時などで、文化財や文化遺産では相手を構えさせてしまうと思う時には、また既存の文化遺産の概念の壁を越えてほしいと思う時には、文化資源を使うなどです。スウェーデンの友人も似たようなことを言っていたのを思い出します。言葉が安定しないということは、文化遺産の概念そのものが世界的に大きく変化していることと関係しています。

### 文化遺産としての価値の所在

日本での文化財と文化資源の扱いの違いについて、文化財はハイカルチャー、文化資源はサブカルチャーを扱うとの説明を聞いたことがあります。この場合の文化財とは文化財保護法で国宝あるいは重要文化財に指定される高い価値があるものと考えればいいのでしょうか、しかしそうした仕分け、あるいはヒエラルキーのつけ方は国外では通用しないでしょう。ただここで言えることは、美術、建築、考古学分野でそれぞれの専門家によって高い芸術的、歴史的価値があると認められた研究対象だけが文化遺産の主流を構成していた時代ではなくなったということです。

サブカルチャーあるいは大衆文化も今では間違いなく文化財であり、文化遺産です。既存の学術的研究分野の価値付けの体系がそのまま文化遺産の価値を判定するプロセスに移行するわけではなく、また単純にそうであってはいけないと考えられるようになってきています。このことはニュージーランド、オーストラリア、アメリカ大陸など、先住民族の文化振興の問題を抱える国々では、さらに重要な課題となっています。マイノリティの人々の文化遺産の価値を判定するに際しては、それぞれのグループにとっての価値が、一般的な学術的価値に優先する場合もありうるからです。日本でも、地域の文化遺産を考える場合の価値付けのプロセスが地元の人々に委ねられ、専門家はよきアドバイザーとしての役割のみを果たすという事例が生まれています。

### 変化を前提とする文化遺産の概念

文化遺産の価値を把握する方法が多様化しているのと同様に、保存とはどのような行為をいうのかということもまたこれまでの枠組みでは把握しきれなくなっています。遺跡などすでに過去のものとなって変化を止めてしまった遺産に対して、今も生きて変化を続けている文化遺産を特に指して言うために、例えばリビング・ヘリテージ (Living Heritage) すなわち「生きている遺産」などという言葉が使われるようになりました。リビング・ヘリテージは、人が住んでいる都市や集落から、祭り

などの無形遺産まで幅広い領域をカバーしますが、重要であるのはそこに必ず人が介在するということでしょう。

「生きている」という形容詞と、「遺産」という過去のことを指す言葉の組み合わせは何か変だとも思いますが、もしかしたら Heritage（ヘリテージ）を遺産と訳するのがすでに間尺に合わなくなっているのかもしれませんが。ある地方の伝統行事について地元の人が、遺産などと過去の遺物のように呼ばれたくないと言っていたのを思い出します。

国境を超えて文化遺産を考える際の文化の多様性を重視する立場においても、また一つの国で地方の時代を尊重する政策的な立場においても、より地元に着目した視点で総合的に文化遺産について考えることを可能にするこの語は、非常に重要なキーワードとなっています。

#### 文化遺産の概念の統合 - 持続可能な社会の構築に向けて

1992年に世界遺産条約の現場に導入された文化的景観は、まさにそうした遺産の概念を象徴するものとして、たちまちのうちに各国に広まることとなりました。

伝統的な土地利用を媒介に文化と自然を連携する文化的景観の概念は、持続可能性を求めて人間と地球環境との関係を見つめなおす世界的な動きの中で生まれてきました。純粋な自然を守るためには、まずその周辺に住む人間の生活を考える必要があります。自然保護の側で始まった自然と人間の境界領域で持続可能な開発を目指す様々な試みが、文化的景観の概念を生む母体となりました。伝統的な土地利用の見直しは、各国の土地利用政策、農林水産業の振興にも有効となります。また土地を媒介とすることで動産あるいは不動産である有形の文化遺産から無形の文化遺産まで、自然や景観をも含んで種別を問わない文化遺産の概念の統合が可能になります。

文化的景観の導入から10年、ユネスコは無形文化遺産に関する新たな条約を採択しました。文化的景観の拡充を通して無形遺産をも含む文化遺産の概念の統合を目指していた専門家たちは、無形遺産が別の枠組みで進むことを懸念していました。しかし条約は発足して、ようやく具体的な作業が進もうとしています。この新しい条約に新たに盛り込まれることとなった文化的空間という言葉は専門家の関心をひいています。文化的景観とおそらくは同じものを目指すことになるであろうこの文化的空間の概念がどのように進んでいくのか、私は大いに注目しています。



ラオス・ルアンブラバンの町並み

（文化遺産国際協力センター・稲葉信子）

## Column 2

## 研究所昔語り：アジア文化財保存研究室草創期

現在の文化遺産国際協力センターの前身は、1990年10月1日に発足したアジア文化財保存研究室です。今でこそ、10名以上のスタッフが常時働いている文化遺産国際協力センターですが、発足時は、室長と研究員との僅か二名だけの組織でした。しかもそのうちの一名は所内の別の部署からの移動ですから、純粋な新規職員はたった一人だけという、何とも寂しい立ち上げでした。

このためなのか、発足時には組織のための専用スペースは与えられず、当初は第一修復技術研究室の一角を間借りして辛うじて机だけ置かせてもらっているような状態で、組織としての名前は「アジア文化財保存研究室」でも、現実にはそのような名前の部屋は図面上に現れないという状態が暫く続きました。独立した専用の研究室を与えられたのは、1993年に国際文化財保存修復研究室と名称が変更されて以降のことで、今の文化遺産国際協力センターの草創期は、本当に小さな組織が細々と活動を行っていたという印象です。

そんなアジア文化財保存研究室が発足して最初に手がけた大きな仕事は、アジア文化財保存セミナーの開催でした。これは、その後14回まで続けられ、現在も続けられているアジア文化遺産国際会議に継承されているものの第1回に当たるもので、組織発足の僅か一月後、1990年11月9日から行われたものです。当時の東京国立文化財研究所では、国際研究集会をそれまで既に14回開催した実績があったとは言え、やはり現在に比べれば国際会議というのはそれほど頻繁に行われるものではない時代でした。

このため、アジア13カ国（及びイクロム）から専門家を招聘して一堂に会した会議を一週間にわたって行うという機会は、当時としては研究所の一大イベントとして捉えられていました。もちろん、たった二人のアジア文化財保存研究室だけでそのようなセミナーを開催できるはずもなく、保存科学部、修復技術部、そして庶務課の多大なバックアップを受けて行ったものです。主たる会場が京都国際会館でしたので、10名を越える研究所スタッフが京都国際会館の宿泊施設に泊まり込み、さながら合宿のような雰囲気では行われました。今思えば、地下鉄も北大路までしか行っていなかった時代ですから、あれだけの人数の外国人参加者を、タクシーで京都の町を引回すのは本当に大変なことでした。

その時代を偲ぶエピソードを一つ紹介しますと、セミナー期間中の1990年11月12日は、今上陛



平城宮遺構を見学する外国人参加者

下の即位の礼が行われた日でした。前年の昭和天皇崩御を受けて、平成2年の11月に即位の礼が行われたわけですが、この日はその年だけ休日になっており、京都の町には日の丸が溢れていました。セミナーはその日はオフとして、外国人参加者は一日京都で自由見学にしたのですが、興味津々の外国人から日本の皇室について様々な質問を受けたことを思い出します。

その後、アジア文化財保存セミナーは、奈良で行われたり京都で行われたりしながら、原則として年一回ずつ回が重ねられていきます。その時々、やはり研究所にとって大きなイベントであり続けていたとは思いますが、やがて国際会議を行うことは研究所にとっても世間一般にとっても普通の出来事となってきて、数ある年間行事の中の一つという位置づけに徐々に変わっていきます。2000年に研究所の新しい建物が完成して以降は、東京での開催が基本となり、その頃までにはセンター（新庁舎完成時は国際文化財保存修復協力センター）のスタッフも充実し、また国際会議の開催に慣れてきたこともあり、殆どの業務はセンタースタッフだけで行うことができるようになっていったのです。

ちなみに2006年からはアジア文化財保存セミナーを発展的に引き継いだアジア文化遺産国際会議が開催されており、今年度は、2008年3月にウズベキスタン共和国のタシュケントを会場として行われる予定です。ついに日本を出て外国でこの会が開催されるという点もさることながら、その初めての海外での開催地が、中央アジアのウズベキスタン共和国であることに感慨を覚えます。思えば第一回のアジア文化財保存セミナーが開催された1990年には、ウズベキスタンはまだソ連の一部であり、独立国家ですらなかった場所でした。ですから、アジアの一部という認識も乏しく、とてもアジア文化財保存セミナーに招聘しようなどという発想はありませんでした。

そのような土地から参加者を招くばかりでなく、今回はそこを会場としてこの会が開催されるのです。文化遺産国際協力センターと言えば研究所の中では最も新しい部署で、草創期の話とは言っても、そんなに昔の話ではないという気がしていましたが、その短いセンターの歴史の中でも、確実に世界は動いているということが実感されます。そうした世界の動勢をしっかりと見据えながら、これからも確実に国際協力を推進できる部署として機能していきたいものです。



アジア文化財保存セミナー会議風景



京都国際会館とセミナー参加者

（文化遺産国際協力センター・朽津信明）



講演の様子



会場風景

のプログラムの詳細は、ホームページ（<http://tobunken.go.jp/~geino/kokai/07kokai.html>）をご覧ください。

公開学術講座は旧芸能部時代から通算すると38回目となりますが、会場が東京以外となったのは今回が初めてです。今後も各地での開催を積極的に計画して行きたいと考えています。

（無形文化遺産部・飯島 満）

#### 第41回オープンレクチャー

当所では、美術史の研究成果を広く知って頂くための活動の一環として、毎年秋に1回2日間にわたってオープンレクチャーを開催しております。昨年までは美術部の主催でしたが、機構改革に伴い本年より企画情報部が受け継ぎ、今年で41回を数えることとなりました。

本年は、11月2日には、江村知子「光琳の目と手」、中部義隆氏（大和文華館）「矢代幸雄の琳派観」と題し、近世絵画、とりわけ国際的にも評価の高い琳派を中心に研究発表が行われました。江村は、江戸時代における尾形光琳の芸術性を、主に「四季草花図」（津軽家旧蔵・個人蔵）について、作品成立過程と後世に与えた影響を考察しました。また中部氏は、近代に至って琳派作品がどのように見出され、評価され

ていったのかを、矢代幸雄という日本における美術史学草創期の研究者の目を通して跡づけられました。

11月3日は、山梨絵美子「矢代幸雄と美術研究所」、荒屋鋪透氏（ポーラ美術館）「黒田清輝のフランス体験 —芸術家村グレーから黒田記念館へ」という2名の講師による近代美術史に関わる研究発表が行われました。山梨は、当研究所の前身、昭和5年に設立された美術研究所の初代所長でもあった矢代幸雄が構想した美術研究所の具体像を考察しました。また荒屋鋪氏は、日本の美術制度の形成に大きな役割を果たし、美術研究所設立の立役者でもあった黒田清輝が、フランス留学、とりわけパリ近郊のグレー村における芸術体験から得たものを具体的に示されました。

いわゆる文化財に対する関心は、年々高まっているようです。今後も、よりいっそう美術研究を進展させ、作品の持つ豊かさを多くの人に伝えていきたいと思います。

（企画情報部・皿井 舞）

#### 研究報告書『「湖畔」物語』 研究協議会

企画情報部の研究プロジェクト「東アジアの美術に関する資料学的研究」とし



黒田清輝「湖畔」 撮影：城野誠治

て、黒田清輝「湖畔」(国指定重要文化財、1897年、キャンバス・油彩)をとりあげ、多角的に検証して研究成果報告書としてまとめる予定です。そのため10月12日に、当部において所外の専門家6名の参加をあおぎ、中間報告として研究協議会を開催しました。今日、広く親しまれているこの作品の誕生の背景から、評価の歴史、作品そのものの創作の経緯と「もの」として現状等について発表がおこなわれ、活発な討議が重ねられました。一点の作品について、これまでになく深く多面的な研究がなされ、そのユニークな研究成果が期待されます。

(企画情報部・田中 淳)



「黒田清輝ポートレート」 撮影年不詳  
20.5 × 15.3cm

### 特集陳列「写された黒田清輝」

11 月15日より、黒田記念館の二階展示室において「写された黒田清輝」

と題する特集陳列が開かれています。これは平成18年度に、黒田清輝夫人照子のご遺族にあたられる金子光雄氏より、東京文化財研究所に寄贈された写真等208件の資料の一部を公開す

るものです。資料の大半は、黒田清輝の暮らしを知るポートレートなどですが、これまで未公開の写真もあり、黒田清輝という画家をより深く理解するための貴重な資料です。そのうちから、今回は比較的大判の写真23点を選び公開しています。寄贈写真はすでに原板が失われており、いずれもオリジナルな焼付写真であるため、公開にあたりましては、オリジナル写真の風合いを保ちつつ、原寸大に再現した画像を展示いたしました。これは、写真資料の保存公開という目的のもとにすすめられたデジタル画像形成技術の開発研究の成果の一部でもあります（会期：2007年11月15日から2008年5月17日）

（企画情報部・田中 淳）

### 2007 東アジア文化遺産 保存シンポジウムの開催

**日** 本、韓国、中国の文化財保存専門家が集まった2007東アジア文化遺産保存シンポジウムが、2007年11月1日から2日まで韓国国立中央博物館（ソウル）で開催されました。このシンポジウムは2002年に北京で第1回が、2006年に宮崎で第2回が開催され、今回が3回目の開催となります。シンポジウムの主催は韓国文化財保存科学会と国立文化財研究



リーオーヒー  
李午憲シンポジウム組織委員長の挨拶

所で、韓国国立中央博物館、UNESCO北京事務所、中国文物保護技術協会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会の後援により行われました。シンポジウムには、日本から鈴木、田辺、両文化財研究所長以下約80名、中国から約70名、韓国から約200名のあわせておよそ350名と大勢の参加者がありました。開会式では鈴木所長など来賓からの祝辞があった後、3つの基調講演、29の口頭発表、70のポスター発表と活発な討議が行われました。シンポジウムの最後には日中韓で「東アジア文化遺産保存学会」を設立することが宣言され、会長に国士舘大学の沢田正昭氏、副会長の一人に三浦が選ばれ、本部事務局を当分の間、奈良文化財研究所に置くことが決まりました。また来年度には中国北京で第1回の学会大会を開催することになりました。

（副所長・三浦定俊）

### シルクロードの世界遺産登録の ための国際シンポジウムへの参加

**10** 月30日及び31日に中国の西安で、2010年に予定されている「道としてのシルクロードの世界遺産への登録」のためのシンポジウムが開催されました。日本側からは、同シンポジウムには山内地域環境研究室長と前田耕作客員研究員が参加しました。日本にとって、このシルクロードの登録にはいくつかの問題を孕んでいます。特に問題となるのは、登録が予定されているシルクロードの地理的な範囲です。現時点では、シルクロードの東側の起点とされているのが中国の西安（長安）であり、日本、特に奈良の存在が考慮されていません。登録の申請書でどのような地理的な概念規定がなされていくかについて、今後とも強い関心を

持ち続ける必要があると思われます。

(文化遺産国際協力センター・山内和也)

### 韓国中央アジア学会に参加して

11月10日にソウルの国立中央博物館で「韓国中央アジア学会」が開催されました。今回の学会は、「敦煌」をテーマとするもので、フランス・ギメ東洋美術館のジャック＝ジエス氏、イギリス・大英図書館のスーザン＝ウィットフィールド氏、ロシア・エルミタージュ美術館のサモスュク＝キラ氏が敦煌壁画、敦煌文書の研究、アーカイブをテーマに報告を行い、敦煌研究院の李最雄氏が敦煌壁画の保存と科学研究について、東文研文化遺産国際協力センターの岡田健が日中共同による敦煌壁画の保護活動について報告を行うという、敦煌学の全体とそれに関わる世界中の専門家の活動にまで視野を広げた、極めて意欲的な学会でした。韓国の中央アジア学会は創立14年という若い組織ですが、日本や中国、アメリカで学位を取った研究者も多く、自らの研究対象へ積極的にアプローチする姿勢はすばらしいものです。11月2日に同じ国立中央博物館で設立された「東アジア文化遺産保存シンポジウム」、あるいは毎年着実に実績をあげつつある「東アジア紙文化財保存修理シンポジウム」など、韓国



韓国中央アジア学会主要メンバーとの記念撮影

との連携は文化遺産研究と保護のあらゆる面で、今後重要さを増していくことでしょう。

(文化遺産国際協力センター・岡田 健)

### 久野健氏資料の寄贈受け入れ

昨年7月、87歳で逝去された当所名誉研究員の久野健氏のご遺族より、久野氏の調査による写真資料と調書をご寄贈いただきました。久野氏は日本彫刻史を研究され、精力的に現地調査に赴かれ、その成果は『東北古代彫刻史の研究』(中央公論美術出版)、『仏像集成』(学生社)、『日本仏像彫刻史の研究』(吉川弘文館)など多数の著書によって公になっています。

寄贈の写真はB4、4段のファイル6本分、調書はノートに丹念に記されており、その数は300冊を超えます。これらの資料を目録化し、公開すべく、整理を進めていく予定です。

(企画情報部・山梨絵美子)

### 寄付金の受け入れ

東京美術商協同組合様から、東京文化財研究所における文化財に関する調査・研究等の成果の公表にかかる出版事業の助成を目的として、また(株)東京美術倶楽部様から東京文化財研究所における研究事業の助成を目的として、それぞれ寄付金のお申し出がありました。

東京美術商協同組合様からは、2001年秋から毎年春と秋に各100万円のご寄付をいただいております。今回で13回目となり、また、(株)東京美術倶楽部様からは、昨年秋と今年春に各100万円のご寄付を頂いており今回で3回目となります。



下條理事長、浅木社長から寄付を受ける鈴木所長  
左から吉田副理事長、下條理事長、浅木社長、鈴木  
所長、永井管理部長

12月17日、港区新橋の東京美術商協同組合において、鈴木所長が東京美術商協同組合下條啓一理事長並びに（株）東京美術倶楽部浅木正勝代表取締役社長から寄付金を受領いたしました。なお、今回までにご寄付いただいたことに対して、東京美術商協同組合下條啓一理事長並びに（株）東京美術倶楽部浅木正勝代表取締役社長にそれぞれ鈴木所長から感謝状を贈呈しました。その後、文化財保存・修復並びに美術品等の展覧会に関する文化事業について懇談しました。当研究所の事業にご理解を賜りご寄付をいただいたことは、当研究所にとって大変有難いことであり、研究所の事業に役立てたいと思っております。

（管理部・後藤嘉信）

### 勤労者美術展東京都知事賞受賞

**管**理部管理室会計係の石丸真弥さんが、2007年12月2日に東京都知事から勤労美術展東京都知事賞（書の部）を受賞し、鈴木所長にその報告を行いました。

鈴木所長からは、今回の受賞に対して、お祝いの言葉が述べられた後、作品についての説明や創作活動の状況などについて懇談しました。この美術展は、東京都が都内勤労者の日頃の創

作活動の成果を発表する場として「勤美展」の愛称で親しまれ、今年が60回目という大きな節目を迎えた歴史ある展覧会です。

今回は、日本画、洋画、立体造形・工芸、書、写真の幅広い分野にわたる合計880点が出品され、「書」部門においては47点の出品のうち東京都知事賞は最も栄誉ある賞です。審査員からは「力強い線條で、若さが作品全体にあふれている。作品構成は、「序破急」と三つの部分で構成し、中央で大きく盛りあげている。行間の白も美しく、冬行との響きあいも見事」と選評されています。

石丸さんは、子供のころから書道に強い魅力を感じ、大学では書道科に進学し、その後大学院で文学研究科書道学を専攻し、研究面でも業績をあげています。現在は、読売書法会や藍筍会の書道団体に所属し、本研究所に勤務する傍らの限られた時間の中で創作活動を行っています。文化財研究の拠点である本研究所での勤務は良い刺激であり、今後より良い作品を創作し、芸術文化の発展に寄与したいと頑張っています。石丸さんの主な作品や活動等については自身のホームページ（<http://www.h2.dion.ne.jp/~shinya-i/top.htm>）でもご覧頂けます。



受賞を喜ぶ石丸さん、鈴木所長、永井部長、後藤  
（右から永井管理部長、鈴木所長、石丸さん、後藤）

（管理部・後藤嘉信）

## 刊行物のご案内



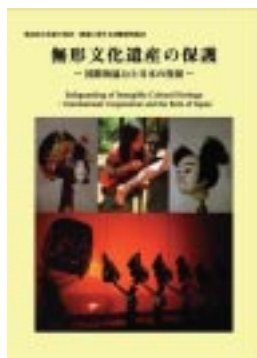
### 『懷素自叙帖検測報告』

台湾の國立故宮博物院との共同調査研究報告書。卓抜な草書で知られた懷素により8世紀後半に制作された自叙の卷子本を、高精細撮影、赤外線撮影などにより精査し、制作、伝来に関する諸説に再考を促すこととなりました。2005年、國立故宮博物院（＋886-2-2881-2021）、定価800元



### 『美術研究作品資料5 黒田清輝《湖畔》』

黒田清輝の代表作《湖畔》について、度重なる調査や収集資料をふまえ画家とモデル、創作のプロセス、評価の変遷などの面から多角的にとらえなおした研究成果報告書。2008年、中央公論美術出版（03-3561-5993）、定価6,000円



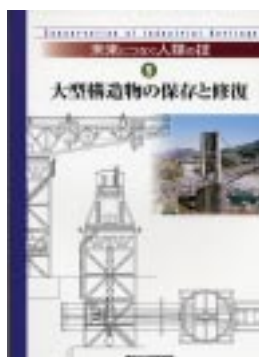
### 『無形文化遺産の保護—国際的協力と日本の役割—』

第30回国際研究集会「無形文化遺産の保護—国際的協力と日本の役割—」での発表・討論をまとめた報告書です。無形文化遺産部のHP上で、全文および英訳版のPDFを公開する予定です。



### 『DVD文化財生物被害防止ガイド』

『文化財生物被害ガイドブック』をテキストにDVDを見することで、IPMによる害虫対策の流れや実際の処理法の具体的なイメージがつかめます。2004年、（株）クバプロ（03-3238-1689）、定価4,410円



### 『未来につなぐ人類の技5-大型構造物の保存と修復』

「未来につなぐ人類の技」シリーズの第5巻目。ダム、橋梁、トンネル、ドック等土木構造物の保存修復の国内外における実例を調査し、その実際と問題点および解決の試みを紹介します。2006年、エディトリR（03-3793-6640）



### 『シルクロードの壁画—東西文化の交流を探る—』

第29回国際研究集会「シルクロードの壁画が語る東西文化交流」での各発表・討論をまとめました。シルクロード沿いに広がる壁画が抱える問題を、美術史、保存修復、技法材料といった視点から検討しています。2007年、言叢社（03-3262-4827）、定価6,800円

## 外国人来訪者

| 年月日      | 来 訪 者 (所属)                              | 目 的       |
|----------|-----------------------------------------|-----------|
| 19.10.23 | 貢連敏、過志文、李秀蔣 (河南省文物考古研究所)、清旭 (河南省政府弁公四処) | 施設見学      |
| 19.10.31 | 郭弘仁他 1 名 (国立晋州博物館)                      | 施設見学      |
| 19.11. 6 | 趙建龍 (甘肅省文物考古研究所)、尤宝銘 (甘肅省博物館)           | 施設見学      |
| 19.11. 9 | 焦南峰 (陝西省考古研究院)                          | 表敬訪問      |
| 19.11.19 | Blas Sierra De La Calle (バリャドリッド東洋美術館)  | 表敬訪問、施設見学 |
| 19.11.27 | Pallo Jordaen (南アフリカ芸術文化省)              | 意見交換      |

管理部・佐野智典

## 東京文化財研究所人事異動

- 平成20年1月1日付け 採用：文化遺産国際協力センター特別研究員・影山悦子

## 黒田記念館公開日カレンダー

- 公開日：木曜・土曜 午後1時～4時 入館料：無料

| April 4 |    |    |    |    |    |    | May 5 |    |    |    |    |    |    | June 6    |           |    |    |    |    |    |
|---------|----|----|----|----|----|----|-------|----|----|----|----|----|----|-----------|-----------|----|----|----|----|----|
| 日       | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  | 日     | 月  | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  | 日         | 月         | 火  | 水  | 木  | 金  | 土  |
|         |    | 1  | 2  | 3  | 4  | 5  |       |    |    |    | 1  | 2  | 3  |           |           |    |    |    |    |    |
| 6       | 7  | 8  | 9  | 10 | 11 | 12 | 4     | 5  | 6  | 7  | 8  | 9  | 10 | 1         | 2         | 3  | 4  | 5  | 6  | 7  |
| 13      | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 11    | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 8         | 9         | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| 20      | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 18    | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 15        | 16        | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| 27      | 28 | 29 | 30 |    |    |    | 25    | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 22/<br>29 | 23/<br>30 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |

## ご案内

- 黒田記念館 特集陳列「写された黒田清輝」

会期：2007年11月15日(木)～2008年5月17日(土) 会場：黒田記念館2階展示室

平成18年度に、黒田清輝夫人照子のご遺族にあたられる金子光雄氏より、写真資料等が当研究所に寄贈されました。オリジナルのもつ「風合い」を失わないように複製を作成し、大判のポートレートを中心にした23点を黒田記念館2階展示室において公開しています。

## 編集後記

●第32号は20ページに及ぶ増刊号となりました。その内容は、昨年10月から12月の間に行われた調査研究、保存修復への協力、人材育成や研修、研究交流、そして情報発信など、多種多彩な記事からなっております。まさに研究活動の充実ぶりが記事の豊富さに直結した結果であると自負しております。今後も研究所の活動をより一層わかりやすくお伝えしていくよう精進していきたいと存じます。

(企画情報部・勝木言一郎)

TOBUNKENNEWS no. 32

発行日：2008年2月28日

独立行政法人国立文化財機構

発行：東京文化財研究所

印刷：よしみ工業株式会社

編集：企画情報部